

セーヴル磁器における青磁色の表現 ―中国磁器との関わりを中心に―

今井 祐子 (福井大学)

中国磁器の製法は、景德鎮での布教経験をもつイエズス会宣教師ダントルコール神父の書簡を通して、1712年と1722年にフランスへ伝えられた。だが、磁器原料が伴っていなかったため、当時のフランスにはその情報を十分に理解できる者はいなかった。ダントルコールの書簡は18世紀のフランスでは磁器に関する果てしない議論を誘発したにすぎず、製作に与えた影響は少ない。ところが19世紀に入ると、セーヴル製作所が中国磁器の原料・作品・情報を収集すると同時に中国磁器の技術に関する研究に努めて多くを学び、ダントルコールが伝えた情報を修正した。19世紀に同製作所で行われた中国磁器研究で最も注目された色釉は銅紅釉で、次に注目されたのは青磁釉である。本発表では、19世紀のセーヴル磁器における青磁色の表現に着目し、倣製から創製への転換という視点から、参考にされた中国青磁とセーヴル磁器との技術上の関わりについてその実態を考察する。

本発表では、中国青磁に関しては、景德鎮在住のジョゼフ・リー神父より1846年にセーヴル製作所が受理した青磁片、在漢口領事フェルナン・シェルゼールより1883年に同製作所が受理した青磁釉サンプル、及び北京へ派遣された化学教師アナトール・ビルカンより1878年から1888年にかけて同製作所が受理した中国青磁の作品を取り上げる。セーヴル磁器に関しては、1880年代以降に造られた青磁釉の詳細、1880年代以降に作られた新硬質磁器（従来のものより素地中のカオリン分を少なくし、より低温で焼成できるようにした新しいタイプの硬質磁器）の加飾法、1890年以降の磁胎の白色度を取り上げる。

19世紀後半になって漸くセーヴル製作所は、中国の青磁釉の淡緑色が酸化鉄を還元焼成して得られることや、優美な釉色を得る際の焼成コントロールが難しいこと等を認識した。セーヴルの新硬質磁器は中国磁器の化学組成を参考にして19世紀後半に開発されたが、その磁胎と色釉は約1280℃の酸化炎で本焼成される。新硬質磁器用の色釉の一つである「céladon」釉は、着色剤として鉄以外のものも用い、素焼きした白磁胎の上に掛けて酸化焼成される。「céladon」釉が施された作品では、磁胎に陰刻や陽刻をして釉色の濃淡で文様が表されたり、泥漿で文様が描かれたりする。こうした点には中国青磁の影響があるが、セーヴル磁器の手法はより複雑である。さらに、「céladon」釉は釉下彩・釉上彩・他の色釉とも併用されているため、セーヴル製作所はモノクロームの美を極めるよりもポリクロームの中で青磁色を活かす道を選んだと考えられる。本発表ではそこに至るまでの流れを跡づけつつ、こうした選択をしたセーヴル製作所の狙いを考察する。

本発表では、中国磁器という補助線を引いて、セーヴル磁器の技術改良の一端を明らかにしてみたい。